

虹の架橋

今月の題字
聖生(せいりゅう)清重さん
(みどり市東町)

富弘美術館の新館長に就任した聖生さんは星野富弘さんと小学校からの幼馴染。温和で気さくで誠実な聖生さんに会いたくて美術館へ行く回数が増えています。

福恵稲荷で3月10日に初午祭り
「ままコモンズ」実現への夢

「大間々」の地名は「大きな間々」(渡良瀬川の河岸段丘でできた崖)に由来しています。
「間々」の崖は、上桐原から諸町に至る数キロメートルに及び、杉林や雑木林が入り組んだ地形は昔から子どもたちの格好の遊び場でした。
大間々高校下の間々の木立の中にある岡直三郎商店の「福恵(ふくえ)稲荷」では今年も、旧暦の二の午の日に「初午祭り」が行われます。
「ドーン・ドーン」という太鼓の音を聞くと、「七色菓子」をもらって喜んで子供頃の思い出が甦ります。縁起のいい名前の「福恵稲荷」を大間々のパワースポットにしたいものです。



歌人で教育者で郷土史家だった萩原康次郎先生の随筆集『間々はゆりかご』の中に印象深い一文が綴られています。
「『まま』は大間々町にとって、地理学上でも郷土史上でも、貴重な文化遺産



小耳にはさんだ いい話
(文責・靖)
《199》

毎月4回、心温まる話を掲載して発行している「みやざき中央新聞」の2月13日号に、作家・下村湖人の短編小説『心窓をひらく』の話が紹介されています。それを読んでとても感動しました。
進君という少年が、学校へ出かける時、前夜書きつけた紙片を二つに折って、お母さんの机の上にそっと置いて、学校へ出かけて行きました。その紙片には次のように書かれてありました。

無償の愛

「かんじよう書き」
市場にお使いに行き賃10円
お母さんのあんま賃 10円
お庭のはき賃 10円
妹を教会に連れて行き賃10円
婦人会の時の留守番賃10円
合計50円 進 お母さんへ
進君のお母さんはこれを見てニッコリなさいました。そして、その日の夕食の時、今朝のかんじよう書きと50円が机の上に乗っていました。
進君は大喜びで、お金を貯金箱に入れました。
その翌日、進君がご飯を食べようとすると、テーブルの

である。この、町民の揺りかごであつた「まま」を破壊から守り、これを保存する手段を施してほしいものである。こはパーク(公園)ではない。柵がないからだ。誰でも自由に入れるコモンズ(自然園)なのだ。名づけて『ままコモンズ』という。これは決して夢ではない。近い将来に必ず実現してほしい私のプランである。」
『間々はゆりかご』が出版されたのは20年前のことですが、大間々町を愛し続けた文学者・萩原先生のロマン溢れる文章と思ひ、今も多くの人たちに読み継がれ、語り継がれてきています。
足利屋の『虹かけ文庫』でも貸出ししています。

世界一小さな
定利屋
トイレ美術館



今月のハガキ《199》
谷口ようこさん『だっこ』

隣県に住む人形作家・谷口ようこさんと10年前に知り合い、親しくさせて頂いています。
谷口さんの創作人形はどれも「母と子」の温かい愛情に包まれていて、作品の絵はがきを見ているだけで優しい気持ちになってしまいます。
先日、谷口さんから創作人形の絵ハガキをたくさん頂きましたので、ご希望の方に1枚ずつ差し上げます。額に入れて飾ってみてください。
お部屋の空気が和んできます。『世界一小さなトイレ美術館』は、「虹の架橋」創刊号からはじまり、素敵な出会いの役目を果たしています。

上に一枚の紙がありました。開いてみると、それはお母さんのかんじよう書きでした。
そのかんじよう書きには
「高い熱が出てハシカにかかった時の看病代。学校の本代、ノート代、エンピツ代。みんなただ。まいにちのお弁当代。ただ。さむい日に着るオーバー代。ただ。進君が生まれてから、今日までのおせわ代。みんなただ。合計ただ。進君へお母さん」
と書かれていました。進君はこれを見た時、胸がいっぱいになって、大粒の涙がこぼれそうになりました。そして、これからはお金をもらわず、どんなお手伝いでも引き受け

てお母さんをお助けしようと思
いました。
お母さんは進君の求めに快く応じながら、さらに「見返りを求めないで助けあう世界」のあることを進君に教えたのでした。



下村湖人著『青年の思索のために』という本の中に『人間の弱味と強味』のことが書かれています。『おたがいにお助けあわないと生きてゆけないところに、人間の最大の弱味があり、その弱味のゆえにおたがいにお助けあうところに、人間の最大の強味がある』
『おたがいにお助けあう』という深い言葉ですね。

靖ちゃん日記

2月24日(金)
親友7人が御殿場の「時之栖」に集まり、「ジョイ会」を開いた。
女医・徐桂琴先生の名前とエンジョイから名づけた「ジョイ会」には、今回も、広島と静岡と埼玉の友人が集まった。「病気の正体」の著者・徐先生は、西洋医学と中医学を統合して「いのちの力」を取り戻す治療を行っている。
3年先まで予約が入っているという、御殿場高原ビルを飲みながら、健康談義や、それぞれの近況を語り合った。
前向きに生きる人達の話は実に面白い。仲間のSさんが専務を務める「時之栖」には、多くの宿泊施設や風呂が点在している。中東の死海の塩を使いた「塩風呂」に入った。海水の10倍の塩分で体外が力加力加浮いて気持ちいい。美肌効果もあるという。長く入りすぎて体中外ヒリヒリ痛んだ。鏡の前に立ってみた。顔は美肌効果で「いい男」に変わった。上半身は「ゆでタコ」のように赤かった。その下は「塩漬けのなめくじ」のようにならなっていた。

3月の声を聞いても、まだまだ寒い日が続きます。炬燵に入ると出るのが億劫になってしまいます。似た者夫婦の我家では、小さな炬燵に足が斜めに4本入り、触れず離れず絶妙の距離感で居眠りを楽しんでいます。時々、足が触れると、何とも言えぬ安心感と幸せを感じてしまいます。「早く炬燵から出て仕事をしなければ」と焦る自分と「もう少しだけ」という甘い自分との心の葛藤は今後もずっと続きそうです。でも、どちらも本当の自分自身。自然体で生きたいと思います。



虹の架橋

検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第200号は4月1日(日)発行予定です。

靖ちゃんの似顔絵提供：ひさかさん

